

日本のプロ野球における「企業家個人オーナー」

—高橋龍太郎（1875～1967）とプロ野球球団経営—

“Private Ownership of Businessman” in the Japanese Professional Baseball :

Ryutaro Takahashi's Management Style in his Professional Baseball Team

脇村 春夫 (Haruo WAKIMURA)

1. はじめに：「企業家個人オーナー」の定義と設定の意味

日本のプロ野球球団の大半は、プロ野球創設の当初から企業がバックにあって球団を支援し、球団オーナーも親会社の社長が兼務している。しかし例外的に企業家でありながら、会社に関係なく純粹に一個人の立場で過半数の球団株を所有して球団オーナーとなり、日本のプロ野球発展の為に貢献した人達がいた。本稿ではこれを「企業家個人オーナー」と定義する。日本のプロ野球史上「企業家個人オーナー」と称する企業家は、以下の表1で示すように3人いた。本稿ではその中で、高橋龍太郎の球団経営の特異性を採り上げてみた。

2. 高橋球団の誕生

昭和29年（1954）、新しい球団「高橋ユニオンズ」がパシフィック・リーグに誕生した。球団のオーナーは企業家個人高橋龍太郎である。田村駒次郎に次ぐ2人目の「企業家個人オーナー」であり、しかも球団に個人名を付けたのも駒次郎の「ロビンス（駒鳥）」に次いで2チーム目であった。「ユニオンズ」は戦前の大日本麦酒のブランド名「ユニオンビール」から採ったものだが、同時に新チームが寄合い所帯ではなく“まとまる”（ユニオン）ことを意味して

いた。

オーナーの高橋龍太郎は昭和12年（1937）、大日本麦酒の社長に就任、戦後の昭和24年（1949）に、過度経済力集中排除法により大日本麦酒が日本麦酒（現在のサッポロビール）と朝日麦酒（現在のアサヒビール）に分割された際に社長を退任するまで、長期間社長としてビール業界の発展に務めた企業経営者だが、球団オーナーになった時点では、すでに79才で財界の第一線からは退いていた。しかし、全国遺族会会長、日独協会会長、日本サッカー協会会長（1947～54年、第3代、高橋ユニオンズ結成とともに辞任）の公職に就いていた^(注1)。

2.1 何故、高橋龍太郎は新球団設立を引き受けたか

それでは何故、高橋龍太郎は海の物とも山の物とも分からない、プロ野球球団経営を引き受けたのだろうか。以下に述べるごとく、そこには永田雅一の強烈なアプローチと巧みな誘いがあったからである。しかし、それだけではない。龍太郎自身が野球が好きであり、戦前プロ野球球団イーグルスに関係したこともあったからでもあるし、更に、財界のバックアップが得られたからである。

(1) 永田雅一の説得

①永田の8球団構想

前年の昭和28年（1953）に大映のオーナー永田雅一は、パ・リーグの会長（総裁と名前を変

表1 3人の「企業家個人オーナー」の比較

オーナー名	田村駒治郎	高橋龍太郎	松田恒次
所属企業名と地位	田村駒（横維） （社長）	大日本ビール（食品） （元社長）	東洋工業（自動車） （社長）
球団名	（戦前）ライオン （戦後）太陽ロビンス →松竹ロビンス	高橋ユニオンズ →トンボユニオンズ →高橋ユニオンズ	広島カープ →広島東洋カープ （昭和43年）
オーナーになった時期、 球団名と年齢	昭和12年（1937） ライオン （33才）	昭和29年（1954） 高橋ユニオンズ （79才）	昭和38年（1963）広島カ ープ、実質昭和43年（1968） （63才）
オーナーになる前の 球団名と所有者	大東京 国民新聞社	なし（新規球団）	広島カープ 市民球団→企業共同所有 →松田恒次個人
オーナーになる動機	買収	新設球団（8球団目） 永田雅一の強い要請	球団の救済
オーナー及び球団の 消滅時期	昭和27年末 松竹ロビンス	昭和32年初 高橋ユニオンズ	現在まで存続。 2代目松田耕平→ 3代目松田元
戦後のオーナーの 在任期間	昭和21年～27年 7年間	昭和29年～31年 3年間	昭和38年～45年 8年間
吸収合併後の球団名	洋松ロビンス（昭和28） →大洋ホエールズ（昭和30）	大映ユニオンズ（昭和32） →大毎オリオンズ（昭和33）	現在まで存続

える）に就任すると、永田構想として従来の7球団から1球団増やして8球団制を強く打ち出した。その背景には、7球団（注2）では試合の編成上1球団が抜けることで具合が悪いことと、この際チーム数を増やして6チームのセ・リーグを引き離そうとする意図があった。一方、セ・リーグの方はチーム数を増やすことは反対で、従来のチーム数を堅持するとのことであった。

②何故、高橋龍太郎か

永田はこれまで高橋龍太郎とは面識がなかった。龍太郎を紹介したのは朝日麦酒社長山本為三郎であった。永田は最初は、新球団の資本としてビール会社の資本を期待して懇意にしていた山本為三郎に参加を呼びかけたが、ビール会社がプロ野球球団経営には手を出すべきではないとの考えで永田の申し出を断った。断った代わりに龍太郎を紹介したのである。朝日麦酒は社会人野球チームは持っていなかった。ビール会社で社会人野球チームを保有しているのは札

幌麦酒で、しかも強豪チームであったから、永田がもしこの話を札幌麦酒に持ち込んでおれば、或いは札幌麦酒は乗ったかも分からない。

③チーム作りは永田が責任を持つ

龍太郎を説得する際、永田は永田一流の大風呂敷を掲げる。即ち、“パシフィック・リーグはあらゆる援助を惜しまない”、“一流選手を放出する”、“チーム作りはこの永田と黒崎（黒崎貞治郎：パ・リーグ理事長）にお任せ願いたい”と。しかし、いざ蓋を開けて見ると次節で放出選手名を挙げるが、新チームに参加したのは、峠を越したロートルばかりであった。永田は龍太郎には甘い言葉で勧誘に務めた一方では、他の球団に対しては“高橋球団からはトレードマネーを出させるから選手を売ってやってくれ”と二枚舌を使っている。ちょうど、2004年の楽天の新チーム結成に際して、不要になった選手が放出されたケースと良く似ている。“父龍太郎は永田に完全に騙された、永田の口車に乗せられた”と龍太郎の三男高橋敏夫（故

人、当時高橋ユニオンズの球団代表)が後日語っている(注3)。しかし、龍太郎の外孫の佐々木四郎は、“祖父龍太郎は、永田に騙されたとは決して思っていなかったようだ、良い選手が最初から来るとは余り期待していなかった”と筆者に話してくれた。

(2) 龍太郎自身野球が好き

龍太郎は野球が好きと言うよりも、運動が好きであった。三高時代はボート部の選手であったが、しかし、自分でするよりもスポーツを見るのが楽しみであった。その一つはサッカー。戦死した四男彦也が京大の名フルバックであったこともあり、彼の供養の為にサッカー協会の会長を引き受けたと言われている。その二つが野球である。プロ野球や六大学野球の実況中継を良くラジオで聴いていたようだ(前掲、佐々木四郎談)。龍太郎は熱烈な早稲田ファンであった。

(3) 戦前プロ野球球団イーグルスに関係

龍太郎は、戦前(株)後樂園球場が創設したがすぐに手放し、河野安通志にオーナーを譲ったプロ野球球団(株)後樂園野球クラブ(イーグルス)の資金的な面倒を見ていた時期があった。当時、どのような経緯で援助するようになったかは定かではないが、球団社長押川清からの要請によるものと思われる。押川清はキリスト教徒であり、同じキリスト教徒の川合信水が懇意にしていた高橋龍太郎を押川に紹介した。

(4) 財界のバックアップ

龍太郎は注1にあるように戦後日本商工会議所会頭であったので、懇意にしていた財界人が多かった。また、前述のように朝日麦酒社長山本為三郎は自分が会社社長として新球団のオーナーになるのを断り、代わりに高橋龍太郎を紹介した手前、高橋球団を支えないわけには行かなかった。そのような背景から表2に示すごとく個人高橋龍太郎が最大の株主だが、あと法人が株主名簿に名を連ねている。しかし、実際にはそれぞれの会社の社長である山本為三郎、藤山愛一郎、小池厚之助の3人が最後まで龍太郎をバックアップした。

表2 高橋球団の主要株主

筆頭個人株主	高橋龍太郎	
法人株主	朝日麦酒	(山本為三郎)
法人株主	大日本製糖	(藤山愛一郎)
法人株主	日東化学	(藤山愛一郎)
法人株主	山一証券	(小池厚之助)

(出所) 山地良造「高橋龍太郎“独立自営”の球団経営」
「ベースボールジャーナル」2。

3. 高橋ユニオンズの戦績と選手の補強

(1) 戦績と入場者数

3年間の戦績を表3で示す。通算勝率0.344は戦前の「企業家個人オーナー」田村駒次郎球団の勝率(0.381)よりも悪い。2005年の楽天の勝率(0.281)よりは良い。

① 1年目の戦績

1年目(昭和29年)は新チームとしては予想外に健闘して6位に入る。7位が東映、8位が大映。6位に入ったのでスポンサーとしてトンボ鉛筆が付き、スポンサー料として3,000万円(現在価値20倍として6億円)が入る。球団名も「トンボユニオンズ」と翌年は改名。これがいわゆる「命名権」である。2004年、近鉄が命名権を売ろうとした時、過去に実例がないと言うことで野球機構から反対され近鉄は取り下げたが、実は戦前の駒次郎球団の「ライオン」といい、高橋球団の「トンボユニオンズ」といい、ちゃんとした実例があったのである。1年目最下位の8位ではなく6位になったので一安心した。苦しい台所事情もありチームの補強に金を使わなかった。それが裏目に出て2年目(昭和30年)は、最下位に転落した。その結果トンボ鉛筆はスポンサーから降りたので3年目(昭和31年)の球団名は、またもとの高橋ユニオンズに戻った。

② 2年目/3年目戦績

2年目の勝率は0.350以下であったので、パ・リーグの規約により罰金500万円を連盟に支払う。3年目は最終戦毎日オリオンズに勝って、辛うじて勝率0.3506となり罰金を免れる。

表3 高橋ユニオンズの戦績

年度	球団名	順位	試合数	勝	敗	分	勝率	監督	バ優勝チーム
(1) 昭和29	高橋ユニオンズ	6/8	140	53	84	3	0.387	浜崎真二	西鉄
(2) 昭和30	トンボユニオンズ	8/8	141	42	98	1	0.300	浜崎真二	南海
(3) 昭和31	高橋ユニオンズ	8/8	154	52	98	4	0.351	笠原和夫	西鉄
計				147	280		0.344		

(出所) 日本野球機構「日本プロ野球記録大百科」(第3版)。

③川崎球場入場者数

高橋ユニオンズのホームグラウンドは川崎球場。高橋ユニオンズのフランチャイズ球場になると言うことで球団設立に合わせて昭和29年(1954)ナイター設備が完成した。このナイター設備は明るいことで好評であった。然しライト側が狭かった。川崎球場は平成12年(2000)に解体された。3ヶ年の入場者数は表4のとおり。1試合の平均観客数は年々減少し3年目は僅かに1,766人であった。年間総入場者数136,000人は巨人の9試合分にしか相当しない。

(2) 昭和29年の補強選手

新チーム結成の初年度に各球団から集まってきた主な選手と高橋ユニオンズでの成績は表5のとおり。前述のごとくこれらの選手は過去活躍したが現在はチームの主力ではない選手達である。しかし、高橋ユニオンズは彼等に対して元の球団に移籍料を払わされた。

この表を見ても分かるのとおり笠原、河内、深見は初年度の打率はそこそこ。笠原、河内の3年間の打率も悪くない(笠原0.283, 河内0.271)。問題は投手のスタルヒンと武末である。スタルヒンはすでに38才、それでも昭和30年(1955)9月4日の西京極球場での大映戦で史上初の300勝投手となる。往年の名投手武末は完全に

表4 川崎球場入場者数

年度	総入場者数	1試合平均入場者数
昭和29年	212,400人	3,029人
昭和30年	163,000	2,329
昭和31年	136,000	1,766
参考巨人	1,190,402人	17,717人

(出所) 報知新聞社「プロ野球25年」(1961年)。

峠を越していた。ちなみに高橋ユニオンズは昭和30年には1試合10失策の有り難くないプロ野球タイ記録を作る。

(3) 3年目(昭和31年)の補強

創立3年目となった高橋ユニオンズは、大昭和製紙から荒川宗一、北川桂太郎を、慶応大から佐々木信也の3人の著名選手の補強に成功する。これは補強の為の資金的裏付けとして当時商工会議所の会頭であった藤山愛一郎が会員に対する呼びかけで、1社10万円×150社=1,500万円を強化資金(藤山資金)として集めることが出来たからである。

■何故、荒川宗一は高橋ユニオンズにきたのか(荒川宗一談)

以下は荒川宗一から直接聞いた話である。先にも述べたように高橋龍太郎は熱烈な早稲田ファンであったので、早稲田のスタープレイヤーであった荒川宗一を自ら勧誘した。当時、大昭和製紙野球部長の斎藤了英(大昭和専務)にも了解を求めた。それと、今度監督となる笠原和夫からも早稲田野球部の先輩として勧誘された。

しかし、荒川は期待されたほど入団の年には活躍していない(打率0.225)。そのせいか、翌年球団解散時には他の球団に移籍していない。

■何故、佐々木信也は高橋ユニオンズにきたのか(佐々木信也談)

佐々木信也は荒川宗一と同じ年の昭和31年(1956)に高橋ユニオンズに入団する。荒川は実業団(大昭和製紙)からだだが、慶応大学から直接プロに行くのは当時としては稀有のことであった(注4)。佐々木信也は入団の年、新人として大活躍する。打率0.289で2塁手として

表5 初年度（昭和29年）に新チームに集まった主な選手達と成績

選手名	元の球団	ポジション	初年度打率	1年目/2年目投手成績
・笠原和夫	南海	1 塁手	0.290	
・スタルヒン	大映	投手		(1) 8勝13敗 (2) 7勝21敗
・武末悉昌	西鉄	投手		(1) 3勝4敗 (2) 0勝2敗
・河内卓司	毎日	3 塁手	0.275	
・深見安博	東映	外野手	0.266	

(出所) ベースボール・マガジン社「球団興亡史」「高橋ユニオンズ」。

パ・リーグのベストナインに選ばれる。その年の新人賞は惜しくも逃したが（西鉄稲尾投手に）、もし稲尾がいなかったら間違いなく佐々木が獲得していたに違いない。

それでは、何故、佐々木信也は高橋球団にきたのかを本人から直接聞いて見た。高橋ユニオンズに行く決心をしたのは、自身が選んだのではなく当時の球団代表の飯塚睦夫（パ・リーグ連盟専務理事から高橋球団に移る、芦田前首相秘書官）の強力な勧誘があったからである。飯塚は六大学での佐々木のプレーも見ており、是非彼を高橋球団にと神奈川県藤沢市の鶴沼海岸の自宅の近くのホテルに泊まり込みで勧誘に務めたその熱意にほだされたのである。

もともと佐々木は社会人野球チームのある東洋高圧（北海道）に内定していたが、飯塚の熱意もさることながら、契約金250万円と給料80,000円/月（注5）に魅力を感じたことには間違いない。何故なら、佐々木信也の家庭は母親一人で3人の息子達（長男道也、次男信也、三男敬也）を学校に行かせていたので経済的には決して楽ではなかったからである。

佐々木信也は入団して見ると最下位チームにありがちな暗いムードはなく、各プレイヤーとも朗らかで、チームが良くまとまっているのにびっくりしたと言う。従って彼も臆する事なく伸び伸びとプレーができたのである。また、オーナーの高橋龍太郎が佐々木にも目をかけてくれており、川崎球場からの帰りの車の中でオーナーが盛んに佐々木の打率を計算しているのを見て知って感激したと筆者に語ってくれた。佐々木は高橋ユニオンズ解散後は大映に移り、更に

昭和33年（1958）には大映と毎日が合併した大毎オリオンズで活躍する。退団後はプロ野球解説者として人気を集める。

4. 高橋ユニオンズの解散

昭和32年（1957）2月25日、岡山のキャンプ地で、球団代表高橋敏夫（高橋龍太郎三男、武蔵野化学社長）によって球団の解散が告げられる。世間体を思えばかって、表向きは大映への吸収合併だが、実際は球団の解散である。ここに、わずか3年で高橋球団は球界から消え去ったのである。選手達は前年の7位大映、6位東映、5位近鉄の順序で指名されたが、指名された選手はごく僅かで、多数の選手は指名されず、プロ野球を去ることになった。選手全員の集まる中で、大映、東映、近鉄のスカウトが来て指名される選手と指名されない選手に分かれる、まことに悲惨な光景であったと佐々木信也は語る。丁度、平成16年（2004）のオリックスによる近鉄の吸収合併（実際は近鉄の解散）がこれと良く似ている。

パ・リーグは高橋ユニオンズの解散により8球団から7球団となるが、翌年昭和33年（1958）には大映ユニオンズと毎日オリオンズが対等合併して大毎オリオンズとなり、セリーグと同じ6球団になる。6球団構想の念願がかなった永田雅一が大毎のオーナーとなる。

4.1 高橋球団解散の背景

それでは、何故高橋ユニオンズは僅か3年で解散せざるを得なかったのか、その背景を以下

永田の思惑と球団経営の側面から考察する。

(1) 永田の思惑：6球団構想に高橋は乗る

永田は7球団から偶数の8球団構想で高橋龍太郎を巻き込んで高橋ユニオンズの新チームの結成を成功させるが、今度はその同じ本人が8球団は多すぎるから6球団にしなければならないと6球団構想をぶち上げる。それは、パ・リーグの信用回復の為には東京を本拠地とする4球団（東映：駒沢，高橋：川崎，大映：後楽園，毎日：後楽園）では多すぎるので、これを2球団（東映：駒沢，大映+毎日：後楽園球場）にしてフランチャイズ制を確立しなければならないとの意図から出たものであった。その為には先ずは、大映と毎日が合併し、それに高橋を加えるシナリオであった。永田にしてみれば高橋球団は自分が生んだ連盟の申し子だから、のたれ死にする前に救わなければならないとの気持ちも働いたと言う人もいるが、果たしてそうだろうか。いずれにせよ高橋龍太郎はパ・リーグのオーナー会議の席上で“6球団制がパシフィックの発展の為ならば、自分の球団が犠牲になってもやぶさかではない”と言い残して席を立った。しかし、大映と毎日の合併交渉は上手く行かず、永田の6球団構想は潰れて、高橋球団だけの削減で7球団になってしまった。これは、明らかに高橋龍太郎の“パシフィック球界の発展の為ならば”の気持ちを永田は完全に裏切ったことになる。

(2) 球団の赤字経営

球団代表の高橋敏夫はもうこれ以上赤字を続けることは資金的にも無理があると感じていたようだ（荒川宗一談）。高橋球団の3年間の決算内容は次の通りと推定される。

とにかく川崎球場の観客数が表4のごとく1試合平均2,000人以下（昭和31年度）では収入は1,000万円しか上がらないのも無理はない。最終赤字6,400万円が球団の赤字として残った。現在価値に直すと約13億円（現在価値20倍として）である。高橋龍太郎個人としては資本金2,000万円の内、自己出資分60%として1,200万円（推定）と、この6,400万円合計7,600万円（現在価値15億円）が自分の財産から消えたことになる。従って代官山の邸宅（敷地1,000坪）も手放した（龍太郎外孫，秋山哲夫談）。

5. 結論：高橋龍太郎の球団経営の特色とその理念

最後に龍太郎の球団経営の特色と理念に入る前に、龍太郎の人柄について触れる。これは龍太郎の外孫の佐々木四郎と秋山哲夫から聞いたものである。

(1) 高橋龍太郎の人柄

人柄は円満であり、技術屋出身であるので地味なタイプであった。大日本麦酒の社長まで上り詰めたが決してエリートコースを歩んだので

表6 高橋球団の総決算

	・ 毎年の収入	： 1,000万円
	・ 毎年の支出	： 6,000万円
	・ 毎年の差引赤字	： 5,000万円
【①赤字額総計】	3ヶ年の赤字合計	： 5,000万円 × 3 = 15,000万円
【②赤字補填の内容】	イ) 大映への吸収合併に伴う各球団の拠出金	
	6球団 × 500万円	= 3,000万円（除く大映）
	ロ) 資本金2,000万円取崩（出資者の出資金は0となる）	
	ハ) 藤山資金3,600万円（先の1,500万円の強化資金以外の賛助金）	
	イ) + ロ) + ハ)	= 8,600万円
	最終総赤字 (①-②)	15,000万円 - 8,600万円 = 6,400万円

(出所) 筆者推定。

はない。従ってトップダウンよりは衆知の意見を良く聞いていた。人を上手くまとめるのにたけていた。商工会議所の会頭をはじめ各種の協会の会長に担ぎ出されたのも龍太郎の人柄から来ている。家では寡黙であった。

龍太郎の趣味は野球を見る以外は書道と将棋で、ゴルフはやらなかった。将棋が好きだった関係で坂田三吉の後援者であった。宗教では曹洞宗、しかしキリスト教にも関心が深く、後述するがキリスト教徒の川合信水に帰依していた。

(2) 高橋龍太郎の球団経営の特色

①球団への愛着

特色の一つは龍太郎は球団への強い愛情を持ち、暇さえあれば川崎球場に姿を見せていた。龍太郎はいつも葉巻をくわえていたので、選手達からは龍太郎が球場に来ていることはすぐ分かった。試合に勝てば選手をほめ、負ければ選手に会わずにそとと球場を後にする。同じ「企業家個人オーナー」でも田村駒治郎のごとく監督の采配にくちばしを入れるようなことは一切しなかった。日々の球団の運営については球団代表初代の飯塚睦夫、2代目の高橋敏夫に委せていた。

②選手からの信頼感

選手に対しては公平に扱った。もっとも選手に接する時は深入りせず、一定の距離を置いていた。選手側からすれば龍太郎はお爺さんのようなもので、オーナーに対する信頼感が深かった。それがオーナーを頂点として、寄り合い所帯でもチームのまとまりを形作っていたのである。龍太郎からすれば組織をまとめるのは会社従業員でも、チームの選手でも、同じことであったのかもしれない。

(3) 高橋龍太郎の球団経営の理念—今日的意義

龍太郎のプロ野球経営の理想像は、プロ野球史上大きな功績を残した。その時は各球団のオーナーは理解しようとはしなかったが、今日になってそれがクローズアップされ出した。それは何かというと、一つは球団としての独立採算性であり、二つ目はプロ野球の選手としての品位、

品格である。

①高橋龍太郎の球団独立採算制度論

龍太郎はいやしくも株式会社として球団を経営する以上、独立採算制度でなければおかしいと言う。しかるに現実には各球団とも赤字を親会社から補填されるのを当然と考え、独立採算意識は皆無であると嘆く(註6)。これはオーナーは親会社の社長で球団を個人経営していないからである。龍太郎の独立採算制度論の背景には、昭和12年(1937)渡米した際、大リーグ、ニューヨークヤンキースのオーナーJacob Ruppert(ビール王、1915年ヤンキースを買収)に会い、彼からアメリカ各球団の独立採算制度を学んだからである。

しかし、現実には高橋球団は上述のごとく赤字経営であり財界からの資金的援助を受けていたので、龍太郎の理念は通用しなかったが、今日になって、球団経営が親会社の宣伝媒体(従って親会社から宣伝広告費として赤字が補填される)に甘んじることなく、球団の独立採算制度を確立して、球団自体があらゆる努力をして赤字経営から脱しなければプロ野球の将来性はないとの危機感を募らせている。それは、すでに龍太郎が50年前に唱えていた事柄である。

②高橋龍太郎の武士道精神論(安部磯雄と川合信水)

龍太郎は自分のチームを“闘志”あるチームに育てるだけではなく、“上品”なチームにしたいと願っていた。そして選手に対しては武士道精神の“品位”、“品格”を求めたのである。龍太郎がこれを選手に求めた背景には、龍太郎が早稲田の野球部長であった安部磯雄の“品位”、“品格”、“フェアプレー精神”と“スポーツマンシップ精神”に傾倒していたからであると荒川宗一は言う。だから龍太郎は安部磯雄の精神を受け継いだ早稲田のファンであった。

もう一人は、川合信水。龍太郎は信水の教育者として、また宗教家(キリスト教)としての教えに心酔し、お互いに交友関係にもあった。信水の教えにも人間としての“品位”、“品格”が唱われている。安部磯雄も川合信水もクリス

チャンである。二人の唱える“品位”，“品格”の精神性はキリスト教から来ているのだろうか。

ひるがえって龍太郎がやかましく言ったチームの“品性”を，果たしてどれだけ現在のプロ野球球団のオーナー，球団代表，及び監督がチームのあるべき姿として選手達を訓導しているだろうか。



高橋龍太郎氏

[写真提供：ベースボール・マガジン社]

【注】

1) 高橋龍太郎の略歴：明治8年(1875)愛媛県喜多郡内子町に生まれる。家は代々藩の財政を司り，庄屋でもあった。龍太郎は父吉衛の訓育を受け，松山中学に学ぶ。卒業後東京高等商業学校(東京商大予科：現一橋大)に入学するも病気の為退学，回復後京都第三高等学校工学部機械科に入り直す。明治31年(1898)卒業後，大学(京大)に行かず大阪麦酒に入社する。直ちにビールの本場ミュンヘンにてビール醸造学を学ぶ。帰国後，大阪麦酒吹田工場に勤務し，ビールの国産化に成功する。明治38年(1905)，

ビールの技術者生田秀の娘ミツと結婚。明治39年(1906)大阪麦酒，日本麦酒，札幌麦酒の3社が合併して大日本麦酒となる。社長馬越恭平。龍太郎は馬越恭平の元で技術者としての力を発揮し，出世する。戦後，昭和22年(1947)日本商工会議所会頭に就任，昭和22年4月参議院全国区当選(6年：緑風会)，昭和26年(1951)7月通産大臣(第三次吉田内閣)就任，昭和28年参議院議員選挙で落選。上記龍太郎の生家，内子町の高橋邸は龍太郎の長男高橋吉隆(故人)によって町に寄贈され，現在文化交流ヴィラとして一般に公開されている。

- 2) 7球団名：阪急，近鉄，東急，大映，毎日，西鉄，南海。
- 3) 高橋敏夫「高橋球団来り去る一バ・リーグ強化の高価な犠牲」『文芸春秋』35巻5号，昭和32年4月，文芸春秋社。
- 4) 元慶応監督の前田祐吉氏談：戦前は，慶応からは宮武，山下，水原，早稲田からは三原などのスター選手が大学からすぐプロに行ったが，戦後は慶応，早稲田の有名選手は直接プロに行かず大学を卒業すると社会人となり社会人野球でプレーするのが一般的な風潮であった。巨人の藤田嗣司投手(故人)でも最初は日本石油に入社した。これは，その当時の慶応，早稲田の選手達の親が折角大学を卒業したのにすぐプロに行くのは格が下がると思ったようだ。佐々木が大学→プロの道を開いたので，それ以降は慶応，早稲田からも直接プロに行くようになった。
- 5) 佐々木信也がもらった80,000円/月の給料は最高給。当時のプロの平均給料は1軍選手で15,000円，2軍選手で6,000円/月と安かった(佐々木談)。ちなみに当時の一流企業の初任給は13,000円/月前後であった(筆者推定)。
- 6) 山地良造「高橋龍太郎“独立自営”の球団経営」『ベースボールジャーナル』2より。

【参考文献】

- ・相沢正夫「高橋ユニオンズという“窓ぎわ球団”をあなたは知っていますか」『スポーツグラフィックナンバー』(No.44)昭和57年1月5日号。
- ・山地良造「高橋龍太郎“独立自営”の球団経営」『ベースボールジャーナル』2，2001年春，野球文化学会。
- ・山地良造「高橋龍太郎と武士道」『ベースボールジャーナル』4，2003年春，野球文化学会。
- ・高橋敏夫「高橋球団来り去る一バ・リーグ強化の高価な犠牲」『文芸春秋』35巻5号，昭和32年4月，文芸春秋社。
- ・高橋敏夫・大和球士「対談バ・リーグ6球団問題どうなる」『野球界』昭和32年11月号博友社。
- ・田村大五「消えた個人名チーム“高橋球団”」『週刊』

ベースボール」平成12年10月16日号，10月23日号ベースボール・マガジン社。

- ・関三穂編「プロ野球史再発掘④」「スポーツノンフィクション・シリーズ17」ベースボール・マガジン社。
- ・「球団興亡史」「高橋ユニオンズ」2004年秋季号 Vol.28, No.4 (P80)，ベースボール・マガジン社。

【面談者】

- ・佐々木信也氏（慶応出身，高橋ユニオンズ入団）2005年12月14日面談。
- ・佐々木四郎氏，秋山哲夫氏（2人とも高橋龍太郎外孫）2006年4月20日面談。
- ・荒川宗一氏（早稲田出身，大昭和から高橋ユニオンズ入団）2006年4月27日，（電話面談）。

（本文中敬称略）